

堆きゅう肥利用の実態と流通円滑化のための課題

久保田富次郎 (九州農業試験場)

Tomijiro KUBOTA : States And Tasks Of Utilizing Livestock Waste

畜産地帯においては家畜ふん尿の処理・流通・利用促進が課題である。ここでは宮崎県北諸地方で行われた農家アンケート調査結果をもとに、集落の立地条件を勘案した上での堆きゅう肥利用・処理等の実態及び堆きゅう肥流通円滑化のための課題について検討した。

1. アンケートの概要と調査対象について

宮崎県は平成元年度に北諸県地域の農家を対象として、家畜ふん尿(堆肥)の処理/利用の実態と問題点の把握を目的としたアンケートを行った。このアンケートのうち都城市内9地区で行われた調査結果を検討対象とした。

都城市内の北諸地方農家アンケート調査対象は9地区、19振興会、配付枚数4,113枚、回収枚数2,469枚であり、回収率は平均で60.0%であった。第1図は農業区分と農家率の2つの指標を基に対象地区の性格づけを行ったものである。ここでは便宜上、9つの地区を6区分(I~VI)に分類した。

2. 堆きゅう肥に利用実態について

堆きゅう肥(家畜ふん尿)の利用に関しては、少ない地区でも6割を超える農家が家畜ふん尿を堆きゅう肥として利用している。畜産と野菜生産が盛んな区分VIでは9割以上の農家で利用しており、水田稲作中心の区分Iでは比較的使用が少ない。

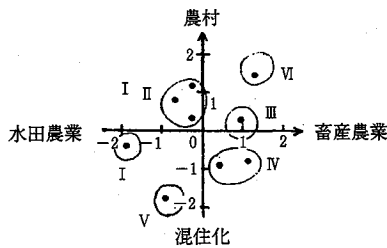
第2図は家畜ふん尿を堆きゅう肥として利用していないと回答した農家に対して、理由を尋ねたものである。取扱いに難点があること、入手が困難なこと、または住民の苦情があることなどが理由として挙げられている。

住民苦情を理由として挙げた農家の多い地区は、混住化の進んだ区分Vとともに畜産が主体である区分IIIである(共に2割程度)。取扱いに難点があるとしたものに関しては、ほとんどの地区で理由の第1位となっているが、その中でも区分I(水田主体)で多い。

また、堆きゅう肥を利用する対象作物は飼料作物が中心となるが区分I(水田主体)やVI(畜産・野菜)では野菜に対する堆きゅう肥の利用が進んでいる。堆きゅう肥の入手方法については水田農業が盛んである区分I、Vなどで購入・交換などにより入手している農家の割合が高い(50%強)。区分VIにおいても野菜生産が盛んなためか、堆肥を外部から入手している農家が多い(45%)。

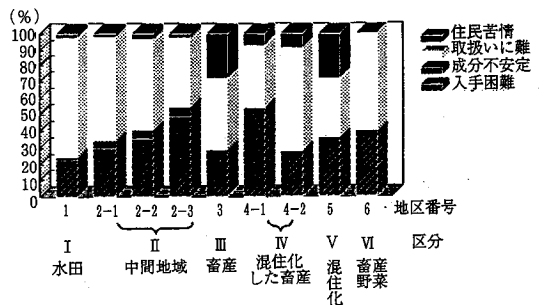
3. 堆きゅう肥の供給について

家畜ふん尿の処理(販売)について、畜産農家に①無料で譲る、②有料で販売、③稲わら等と交換、④自己処理、⑤その他、の5つの選択肢から最高2つまでを選択し、回答してもらった設問に対して、発生する家畜糞尿を自己処理している農家の比率がすべての地区で8割以上に達した。すなわち、畜産農家で発生する家畜ふん尿の多くの割合は自己経営内で処理されており、流通に供される堆きゅう肥はかなり限定されているということがわかる。その他、畜産農家では混住化が進んでいる地域ほど環境汚染問題に対して敏感になっていること等が分かり、また、堆肥利用を進めるための今後の方策として、ハンドリングの改善、安定な入手経路の確立、施設・機械の整備が課題として挙げられた。



地域の分類	地区番号	農家率	主要作物別農家割合		
			稲作	畜産	野菜
I 水田農業主体の地域	1	27.9%	52.3%	17.8%	9.6%
	2-1	37.3	53.7	38.3	4.0
II 中間的な性格を示す農村地域	2-2	43.2	43.6	33.2	7.5
	2-3	48.1	44.4	38.6	2.6
III 畜産農業主体の地域	3	36.8	24.3	53.6	7.8
IV 混住化の進んだ畜産農業主体の地域	4-1	21.7	27.5	47.1	2.9
	4-2	22.9	30.8	46.0	1.1
V 混住化(市街化)の進んだ地域	5	10.6	56.3	30.0	4.9
VI 畜産農業と野菜生産が盛んな農村地域	6	51.9	9.0	58.1	24.6

第1図 アンケート対象地区の類型化



第2図 堆肥を利用していない理由について